

リバース型人工肩関節で 肩の動きの回復を

**肩が痛み、腕をあげられ
なくなる変形性肩関節症**

肩の関節は肩甲骨と上腕骨が接続し、腱板やその周囲の靭帯が関節の動きをサポートしています。腱板とは、肩甲骨から出る4つの筋肉が合わさって上腕骨につく腱の総称です。これらの筋肉のバランスが崩れたり、加齢に伴って腱板の質が衰えたりすると、腕を動かしたときの摩擦で腱板が擦り減り、衝撃などによって断裂することがあります。これが肩腱板断裂という症状であり、初期では腕をあげることができなくても、一カ月ほどすると動くようになり



ちですが、肩の動きの引っ掛かりや、夜間の痛みが残る点が特徴です。

肩腱板断裂は小さな断裂から広範囲の断裂までさまざまな症例があり、大きな断裂が長期間にわたり、関節の軟骨が擦り減ってしまうと、肩の痛みだけではなく腕をあげることも困難になる「腱板断裂性変形性肩関節症」を発症することがあります。

リバース型人工肩関節を用いた新たな治療

肩腱板断裂の治療では、薬物療法やヒアルロン酸・ステロイド製剤の関節注射、温熱療法、運動療法などの保存的治療が提供され、症状が改善しない場合は手術を検討します。手術では関節鏡を用いて小さな切開から断裂した肩の腱板を縫合したり、痛みや炎症の原因となっている部分を除去したりする「関節鏡視下腱板修復術」が一般的です。

また2014年4月からリバース型人工肩関節置換術という治療が開始され、腱板断裂を長い間放置した

京都



医療法人
順和会

京都下鴨病院

烏丸御池整形外科クリニック

大なる可能性をもつリバース型人工肩関節

2014年4月からリバース型人工肩関節置換術が本邦で可能になり、当施設でも2016年9月末までに30例近くの症例をおこなってまいりました。その経験から、この手術には以下の大なる可能性をもつことをお伝えします。

1. 重度の腱板断裂や変形性肩関節症を患う患者様の、強い肩の痛みや不良な動きを改善します。
2. 肩の骨折で保存的加療をされた患者様や、関節鏡やリバース型人工関節以外の人工関節手術を受けた患者様で、その後も痛みを患い、肩の動きが悪い患者様の、痛みや動きを改善します。手術方法、適応疾患や手術合併症については、当病院が当クリニックのホームページの肩関節の外来のサイトをご覧ください。肩関節の外来にお越しいただければ、より具体的な内容をお話しさせていただきますので、遠慮なくご相談ください。

京都下鴨病院 <http://www.shimogamo.jp/>

〒606-0866 京都市左京区下鴨東森ヶ前町17

TEL.075-781-1158(代)

【診療時間(※予約制)】水 10:30~12:00

木 14:00~16:00 / 18:00~20:00 金 9:00~10:30

烏丸御池整形外科クリニック TEL.075-201-0161(代)

<http://www.shimogamo.jp/clinic/index.html>



肩関節部門 森 大祐

ことで腱板が収縮して上腕骨まで届かなくなったケースや、広範囲に断裂を起こしているケースなど、修復が難しい症例に活用されています。これまでも関節リウマチや変形性関節症の治療に、上腕骨側にボール状の骨頭があり、肩甲骨側には受け皿の形状がある、本来の肩関節に似た構造の「解剖学的人工肩関節」が用いられてきましたが、腱板断裂性の変形性肩関節症には効果が期待できませんでした。それに対しリバース型人工肩関節では、上腕骨側に受け皿が、肩甲骨側に骨頭が位置しています。肩の回旋の中心となるポイ

ント(支点)が通常より内側かつ下側になるため、関節の外側から上腕骨を支持している三角筋と支点までの距離が遠くなり、テコの原理で三角筋の力が腕に伝わりやすくなります。そのため腱板の機能が失われていても、安定性を保ちながら肩を動かせるようになります。ガイドラインにより、リバース型人工関節置換術を実施できるのは肩の手術を100例以上、かつ腱板手術を50例以上実施し、学会の定める講習会を受講した医師に限られます。今後の普及が待たれる治療法の1つでしょう。

文/ 滝戸直史